

『葉隠』における武士の超越者との関わりについて

— 聞書三から六を手がかりに —

岡田 大助*

はじめに

本稿では、代表的な武士道書『葉隠』の、主に聞書三から六を解釈することを通して、『葉隠』における武士の超越者との関わりを明らかにすることを目的とする。なお、本稿で超越者とは、キリスト教やイスラームでいわれるような唯一絶対の創造神のことではなく、日本で一般的に通用している「通常を越えた力あるもの」の意味で使用することにする。具体的には、神社に祀られる神々、仏、あるいは先祖の靈魂、死者の幽霊などである。

さて、『葉隠』思想の研究において、従来の説の多くは、主にあるべき奉公人のありようについて述べられた聞書一、二、および冒頭に付されたいわゆる「夜陰の閑談」と呼ばれる「序文」¹にその思想の中心があるとみなし、そこに焦点を当てて論じている。そしてそこでは、武士と超越者との関係は、比較的優先順位の低いものと捉えられている。例えば、「序文」の冒頭から少しあとの箇所には、概ね次のように言われている。すなわち、釈迦の説く仏教も、孔子の説く儒教も、武田信玄の家法も、龍造寺・鍋島藩の家の被官ではないので、当

家の家風とは合わない。平時の奉公においても武事においても、ご先祖様を崇め、御指南を学べば、上下ともに済む。そして、それぞれの道においては、その家々で大切にしていることを学びさえすればよいという。このように見ると、『葉隠』の思想に、神仏への信仰など入る余地はないように見える。そのためであろう、管見の限り、従来の研究において『葉隠』における武士の超越者との関わりが主題的に論じられることは、例外的に聞書一、二でも大きく取り上げられる仏教との関係を別とすれば、ほとんどない。²

しかし、聞書一、二の限定を取り払い、『葉隠』全体の思想を改めて見直してみると、佐賀鍋島の歴代の主君が、超越者との関係を極めて大切にしてきたことが理解される。とりわけ、聞書三から六にかけては、佐賀鍋島の歴代の主君の事跡が列挙されているが、後述するようには、そのなかのいくつかの説話には、歴代の主君と超越者との関係がかなり詳しく描かれている。そして、以上の点を踏まえて「序文」を読み直してみると、冒頭に以下のように記されているのが注目される。

二〇一九年一月三〇日受付

* 江戸川大学 基礎・教養教育センター准教授 日本倫理思想史

御家来としては国学・心掛くべき事也。今時国学目落しに相成候。大意は御家の根元を落着、御先祖様方の御苦勞・御慈悲を以て御長久の事を本付申す為に候。剛忠様御仁心・御武勇、利叟様の御善根・御信心にて、隆信様・日峯様御出現、其御威力にて、御家御長久、今の世まで無双の御家にて候。(太字は論者が強調のためにした)

まず、佐賀鍋島藩の家来は、国学を学ぶべきであるとされる。ここでいう国学とは、日本全体を対象として日本の古典から学ぶいわゆる国学とは異なり、あくまで佐賀鍋島藩という限定された地域の歴史を学ぶことである。続けて、その国学の大意が、御家の根本を落ち着け、ご先祖様方の「御苦勞・御慈悲」によって、御家の長久を基礎付けるためのものであるとされる。すなわち、ご先祖様達の御苦勞やお慈悲によって御家が永く存続していることを知り、御家の根本を確かなものとするためであるという。そして、その国学の概要が続けられる。すなわち、剛忠(龍造寺家兼・隆信と直茂の曾祖父)の「御仁心・御武勇」、利叟(鍋島清久・直茂の曾祖父)の「御善根・御信心」によって龍造寺隆信や鍋島直茂が生まれ、その御威力によって御家が長久であり、今の世までも無双の御家であるという。

やや分かりにくいので同じ序文のあとの部分から少し前提を補ってまとめると、佐賀鍋島藩の歴史(国学)を学ぶことで、龍造寺や鍋島のご先祖様方のご苦勞やお慈悲、ご武勇、ご善根、ご信心などによって御家が永く続いていることを知り、そのおかげでいま主従の契りが深い佐賀鍋島藩の奉公人として充実して生かされていることを知り、そのことによってさらなる御家の長久を基礎付けるべきであるとする内容である。

さて、本稿で特に注目したいのは、利叟の「御信心」である。ここ

に、鍋島家の先祖・利叟清久の信心が、龍造寺隆信や鍋島直茂を生まされさせ、御家の永きにわたる存続を成立させた原因であるとされているのである。ここでいう信心とは、後述するように、おおむね鍋島家が崇拜する寺社に祭られる神仏に対する信心のことであり、それらは以後、鍋島家の当主に踏襲されて行く。ここに我々は、少し後の部分に釈迦も孔子も関係ないと語っていたのは矛盾するかのように、鍋島家の先祖・利叟(清久)が神仏を篤く信仰したことが、佐賀鍋島藩の永きにわたる存続と繁栄を成り立たせる原因とされているのを見取ることができる。

本稿では、主に聞書三から六までに描かれた、清久から光茂に至るまでの、代々の鍋島家の主君に受け継がれた信心の内容を、詳しく跡づけていくことにする。そしてそこから、従来あまり論じられることのないなかつた『葉隠』における武士の超越者との関係を明らかにすることを目的とすることにしよう。

清久

まず、鍋島家の先祖として「序文」に最初に挙げられている清久の信心から確認していこう。鍋島清久は、佐賀藩祖と仰がれる直茂の祖父で、利叟はその法名である。延徳二(一四九〇)年に祖父経直の代から領有する本庄(現佐賀県佐賀市本庄町本庄)に生まれた。そして、郷士として龍造寺家兼(剛忠)を支え、田手畷の戦いでの活躍をはじめ、多くの戦功を立てたとされる。また、彼は慈悲深いことで知られ、祭礼の前に、終夜堀を棹で叩いたエピソードが伝わる。これは、祭礼の際、人々が堀を干して鮒をとるので、鮒を助けようと思つてのことであったという⁶⁾。これが、序文の「利叟様の御善根」の一例であろう。また、彼は序文にもあったように、神仏への信仰が篤く、様々な靈験を得ていたと伝えられている。とりわけ深く信仰していた

のは、第一に、徳善院の彦山権現、第二に、本庄神社、第三に、高伝寺である。以下、これらの寺社に対する清久とその後の子孫達の信心について、順番に詳しく見ていこう。

一 徳善院

徳善院は、清久の父・経直（道寿）が応永年中に現佐賀県佐賀市嘉瀬町中村に創建した寺院である。そこに、清久は彦山権現の分霊を勧請した。これが、徳善院の彦山権現である。勧請もとの彦山権現は、現在、福岡県田川郡添田町の英彦山（一一九九メートル）上にある英彦山神社の旧称であり、またその祭神を指す。彦山は、もともとは北岳・中岳・南岳の三峰があり、それぞれの山頂に神社があつて、神が祀られている。それぞれの祭神は、北岳が正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命（主祭神）・中岳が伊耶那美命（配神）・南岳が伊耶那岐命（配神）である。主祭神の正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命は、よく知られているように、記紀神話において天照大御神と素戔嗚命のうけいの際に、素戔嗚命が勝ち誇ったところから生まれた神であり、勝運の神とされる。

さて、清久は勧請もとの彦山権現に、毎年年越しに参籠した。清久がある年に参籠した際、大雪が降って道が分からなくなり、崖から谷に落ちた。周囲を探したところ、弥陀三尊、即ち、阿弥陀仏、観音菩薩、勢至菩薩の三尊の像を拾った。それを持ち帰り、徳善院に彦山権現を勧請する際の本尊にした。その後、御家が繁昌した、という。このように、清久は彦山権現を篤く信仰し、不思議な霊験まで受けたとされるのである。

ちなみに、概ねこれと同様のことは代々鍋島家に語り継がれていたようで、『葉隠』にも、二代藩主光茂が徳善院に参籠して自筆の願文を収めた際、清久が十八歳ごもりして祈念したとき霊夢を授かり釈

迦像を授かったことを感謝する記述がある（五の一三八）。歳ごもりが毎年というよりは十八年と限定されている点や、授かった像が弥陀三尊像ではなく釈迦像である点で前の伝承とはやや内容が異なるが、概ね同趣旨であるといえる。

また、『葉隠』には、徳善院の本尊には超越的な力による不思議な守りがあることが示唆されている。すなわち、徳善権現の本尊の写しは、英彦山の修験僧坊の一つ・増了坊の本尊であった。かつて焼失した際、本尊は井戸に沈めたので、無事であったという（六の一一）。

さて、清久の熱心な彦山信仰は、代々の鍋島の藩主に引き継がれた。初代藩主勝茂の代には、徳善院の住職が勝茂の代わりに彦山に使わされ、願書を込めたとされる（四の三七）。清久の例にちなみ、年ごとの参籠を継続したいが、危機管理上大名本人が行くわけにもいかないで、代理を立てたのであろう。また、同じ勝茂の代には、徳善院に十二の僧坊が建てられた。そしてその際に必要なものは、すべて清い銀や清い米で整えなければならぬと家臣に指示していたとされる（四の六八）。さらに、二代藩主光茂にも、参籠して自筆の願文を収めた記録がある（五の一三八）。ちなみに、徳善院のご神体は、佐賀の藩主が代替わりの際に見ることになっていた（六の一一）。このように、子孫が一国を領する大名となつてからも、彦山への信仰は、大切に受け継がれているのである。

そして、清久の徳善院への信仰は、歴代の鍋島藩主だけではなく、祭りを通して僧や領民にも共有された。清久の代より、本庄の千本松にて、三年に一度、彦山祭りが行われていたという。そしてこれも、代々の鍋島の主に引き継がれた。その様子が、聞書六の一〇六には、次のように書き残されている。すなわち、まず神へのお供えがただちにお城に上げられる。続けて、未明に徳善院の住職が参り、三汁十菜の料理を頂くと、その席から直ちに彦山に参詣する。次に、鍋島家の菩提寺である高伝寺の僧たちに残らず振る舞いがある。また、本庄郡

に住んでいた僧俗男女にも振る舞いがあったという。

ここまでで、清久より始まった鍋島家の代々の、徳善院の彦山信仰についてまとめておこう。『葉隠』において、「序文」に鍋島家の先祖として最初に名前が挙がる清久は、神仏への信仰が篤く、そのおかげで直茂が生まれ、今の鍋島藩の繁栄があるとされている。その信仰の対象の最も代表的なものの一つが、徳善院の彦山権現である。清久は、勧請もとの彦山権現に例年通り年越しの参籠をして崖から落ちた際、釈迦の像（あるいは弥陀三尊像）を授かり、以降、鍋島家が栄えたとされる。そしてこの彦山信仰は、参籠や願文の納入、保護という形で、勝茂や光茂といった後世の佐賀鍋島藩主にも引き継がれる。さらに、三年に一度の彦山祭りでは、お祭りそのものや、振る舞いを通して、僧や領民にまで、それが共有されている。このように見ると、鍋島家の代々の彦山信仰は、鍋島家の先祖から子孫への縦のつながりを太くし、さらには、領民との横のつながりを深くする極めて重要な役割を果たしていることが理解される。

二 本庄社

本庄社は、現在の本庄神社に当たる。祭神は本庄妙見山淀姫大明神（神功皇后の妹）とも豊玉姫命とよたまひめのみことという。本地は十一面観世音である。現在の佐賀県佐賀市本庄町本庄にある。欽明天皇の頃創始された。そして、清久の頃、廃れていたのを再興し、清房が建立し、直茂が新たに神殿を建てたという。以降、歴代の佐賀鍋島藩主に信仰された。

この本庄社に関して、『葉隠』には、鍋島家の代々の主君と超越的なものとの関わりを理解する上で重要な以下の説話が収録されている。すなわち、清久が本庄社に年越しの参籠をしていたとき、尼一人が参籠していた。尋ねたところ一生存脚いちぞうかくして、故郷も親も知らなという。清久が元旦のお祝いを振る舞って尼の世話をしたところ、

万事心がけて働くので約束して妻にした。程なく、直茂の父・清房が生まれた。しかし、清房が三歳のとき、母は暇乞いして出発したため、追いかけていったが、追い付かなかった。尼は筑後川を越えて高良山の方に行き、行方は知れなかったという（六の一六七）。

この説話は、清久や清房、直茂、さらにはその後の歴代藩主の、神や仏といった超越的な者との深い関係を根拠付けるものとなっているといえよう。すなわち、参籠の際、どこからともなく現れ、故郷も親も知らず、やがて山の方へと去って行った不思議な尼は、清久の信仰の深さに応じて現れた異界からの使いであると解釈できる。そして、神仏の超越性を帯びた尼は、清久と契り、子を産む。その生まれた子である清房は、半分は神仏の使いの血が流れていることになり、超越性を帯びることになる。

さらに、『葉隠』において、その超越性は、鍋島家の子孫へと受け継がれたとされる。すなわち、孫の直茂は、後述するように、『葉隠』において、夢で与賀社の前を通った際、「暗くてしかたがない」という神の声を聞き、白張り装束の神の姿を見たと言われる（三の二八）。これは、夢という超越者と出会うと言われる典型的な場所で、神の声が聞こえ、神の姿が見えているという点で、直茂の超越性を示している。その理由の説明として、超越的なものの血が流れているというの

は、当時においては一つの説明として成立しているといえよう。次に、直茂の息子が初代鍋島藩主の勝茂については、入水入定たとされる勝茂上人の生まれ変わりであるとの説話が残されている（四の二六）。ここに、『葉隠』の編者が、勝茂もまた超越性を持つことを表現しようとする意図を明らかに見て取ることができる。

続けて、勝茂の孫で二代藩主光茂も、食事に関して常人離れしたところがあつたとされる。すなわち、何食分も沢山食べたかと思うと、何食も抜くことができ、それで平気だったという（五の五八、一一八）。あるいは馬に乗り続けていても疲れた様子が見えなかったとき

れる（五の一一六）。このような光茂の常人離れた様もまた、『葉隠』の著者が、直茂や勝茂と同じ超越性を光茂が引き継いでいることを表現していると解釈できる。

このように、『葉隠』において、清久、直茂、勝茂、光茂のすべてに超越性を帯びていると解釈できる説話があることを踏まえると、『葉隠』の編者がこの連続性を明確に意識して編集していたことは明らかである。『葉隠』において、清久に始まる超越者との深く親しい関係は、佐賀鍋島藩の歴代の主君へと受け継がれているのである。

さて、話を本庄社への信仰に戻すと、『葉隠』において、その信仰もまた、代々の鍋島藩主へと引き継がれているとされる。すなわち、直茂の代には、与賀社、大堂社と合わせて、三社に常夜灯を差し上げたという。直茂は隠居後もそれを続けたので、その後、小城支藩が引き継ぎ、常夜灯料を上げていたという（三の五六）。そして勝茂もまた、元旦ごとに、与賀、本庄、白山八幡の三社に願文を収めたという（四の二〇）。

三 高伝寺

高伝寺は鍋島家の代々の菩提寺である。もともとは高伝庵というわずかな庵跡があったが、清久が本庄を領有した際、高伝寺を菩提寺にした（六の二）。直茂の代になると、父・清房を開基にして建物を建てた（六の一五六）。その後、勝茂、光茂の代でもそれぞれ加増し、四代藩主吉茂も御霊屋を、免地（租税を免除された土地）にした（六の二）という。ちなみに、明治四（一八七二）年に最後の佐賀藩主・鍋島直大が、それまで各地に散在していた歴代鍋島藩主の墓と龍造寺隆信の墓を集めて整備したため、現在ではそれらの墓が整然と並んでいる。

まずここで確認しておきたいのは、これまで見てきた三社と同様、高伝寺もまた、清久以来、歴代の主君に大切に信仰されてきたという

ことである。まず清久が高伝寺を菩提寺にする。続けて、孫の直茂が建物を建てて供養を篤くする。しかも、その開基を父・清房にするこゝとで、そこに清房を組み入れる。さらに、直茂の子の勝茂や、曾孫の光茂の代にも、それぞれ加増するなど、代を経るごとに先祖への供養を篤くしている。

次に注目したいのが、とはいえ、これまで見てきた二社が神仏を信仰していたのとは異なり、大切にされる対象が先祖であるということである。高伝寺は菩提寺なので、歴代主君の位牌や墓がある。そしてそこには、先祖の霊魂が、いる、あるいは、お盆などにそこに来ると観念されていたはずである。ここでは、彦山権現や淀姫、豊玉姫といった神社で祭られる神々ではなく、先祖の霊魂が崇拜の対象となっているのである。

さらに、先祖の霊魂を崇拜する際には、先祖の功績が様々に称えられることになるだろう。そして、それを代々続けていくことは、先祖の恩を知り大切にする思いが積み重なり、御家という観念を太く確かなものとするはたらきをすることになるはずである。このように考えると、高伝寺において先祖を崇拜することは、先祖のおかげで今の御家、さらにはそこに生きる一人一人の主君と奉公人の充実した生があることを確認し、御家の観念を確かなものとする機能を果たしていることが理解される。

まとめ

これまでで、『葉隠』聞書三から六までに記された、おおむね清久からはじまり、以後、代々の主君に連続して信仰された重要な神社仏閣に焦点を当て、歴代の鍋島家の主君と超越的なものとの関わりについて確認してきた。まとめておこう。

『葉隠』の序文のほぼ冒頭において、佐賀鍋島藩の繁栄の原点となつたとされる鍋島清久の信心とは、第一に、勝運の神である彦山権

現へ参籠して弥陀三尊を授かり、その後、徳善院の本尊として信仰したところ、運が開けたこと、第二に、本庄社へ参籠して神仏の使いと思われる不思議な尼と出会い、その後、超越性を帯びた子孫を授かったこと、第三に、先祖の靈魂が宿る高伝寺を手厚く保護し、先祖の靈魂を供養したことである。これらの信仰は、以後、鍋島家の繁栄を支える原点として、代々の鍋島藩主に踏襲されることになる。

直茂

ここからは、清久以降の歴代の代表的な佐賀鍋島の主君から始まった超越者との関係と、歴代の主君に特徴的な神仏との関係について確認していく。まずは直茂から見ていこう。

鍋島直茂は、天文七（一五三八）年に生まれ、元和四（一六一八）年に亡くなった。龍造寺隆信に仕え、有名な今山の夜討ちをはじめ、幾多の戦で先陣を務めるなど、龍造寺家臣団における有力な武将として活躍した。そして沖田暁の戦いで主君龍造寺隆信が死んだ後、生き残った家臣たちのなかで最も実力のあった直茂は、主家であった龍造寺家を立て続け主君の座に就くことはなかったものの、龍造寺家の血筋のもの多かつた家臣達に担がれるようにして佐賀鍋島藩の実質上のトップに立ったとされる。さらに、当時天下人であった豊臣秀吉にもその能力を高く買われ、豊臣性を与えられたり（三の一八）、朝鮮の役では、軍奉行の一人とされたり（三の三四）、加藤清正と並んで先陣を務めたり（同前）したとされる。生涯にわたって主家である龍造寺家を立て続けた直茂は、佐賀鍋島藩において形式的には藩主となっていないが、のちに藩祖と仰がれる存在である。佐賀鍋島藩の歴代の主君なかでも、戦国乱世を生き抜き、その繁栄の基礎を作った、最も重要な人物である。『葉隠』では、歴代主君の事跡について語られる聞書三から六までのうち、はじめの聞書三のほぼすべてに直茂に

ついでの説話が収められている。

さて、そこから読み取ることのできる直茂の超越者との関係の特徴は、第一に、与賀社への信仰と超越性、第二に、龍造寺隆信の靈魂への信仰と供養、第三に、戦勝祈願、第四に、安易に騙されないこと、の四点である。以下、順に確認していこう。

一 与賀社への信仰と超越性

与賀社は、現在の与賀神社のことで、河上興止よとひめ日女大明神（神功皇后の妹）とも豊玉姫命ともいわれる。肥前国の一宮で、現在の佐賀市大和町川上にある。本庄社とは場所も近く、同じ淀姫や豊玉姫命を祭神としていることから、同体であるとの言い伝えもある。

この与賀社については、既に触れたように、『葉隠』に、直茂と超越者との関係を窺い知ることができる重要なエピソードが残っている。

ある日、直茂が夢で、与賀神社の前を通ると、後ろから「加賀守、加賀守」と呼ぶ声がしたため、見返ったところ、白張装束の人が石橋の上に立ち「聞くてしかたがない」という。夢の心で「さては常灯を揚げよとのことに違いない」と思い、それより常灯を差し上げるといふ。これは、直茂が隠居した後も差し上げられ続けたので、今では小城藩より上がるとのことである（三の二八）。

既に見たように、この聞書は、直茂が夢で超越者と会い、その声を聞き、その姿を見ることができたことを示している。これは、直茂が超越的なものと関わる資質を持つているとともに、直茂自身もまた超越性を帯びた存在であることを示している。

なお、直茂に関するエピソードが集められた聞書三は、直茂が、与賀、本庄、大堂社の三社に常灯を差し上げることについて記された聞書で結ばれている（五の五六）。このことは、直茂が神仏を篤く信仰したことが、いかに重要視されているかを示すものである。

そして、次の勝茂の代には、この与賀社をはじめ、本庄社、白山八幡に元旦ごとに参加し、願文を収めていたとされる(四の二〇、三六)。ここに与賀社への信仰も、本庄社と同様、歴代藩主に引き継がれているのを見て取ることができる。

ちなみに、与賀神社は、もう少し時代を遡ると、もともとは、山口の大内氏と争って落ち延びてきた少弐政資が、与賀城を修復して居城とし、与賀神社を鬼門の鎮守と崇めて社殿を修復したところから栄えたとされる。龍造寺、鍋島氏が栄える前に、肥前の国の守護職として力を持っていたのは、少弐氏であった。この少弐氏は、鍋島家や龍造寺家とは因縁が深く、はじめ直茂は、少弐氏の養子になっていたが、やがて少弐氏のひどい裏切りがあつて、主家の龍造寺氏と対立するようになると、縁組みを解消し、むしろ龍造寺氏の家臣として率先して少弐氏と戦い、滅ぼすに至っている。このような経緯を踏まえると、少弐氏が大切にしていた与賀神社を信仰するということは、亡き少弐氏の死者の靈魂を鎮めて崇りを押さえつつ、その力を守り神としてその権威ともども取り込む意図があつたとも考えられる。

二 龍造寺隆信の靈魂への供養と信仰 宗龍寺

直茂は、深い忠義をもって隆信に仕えていたとされる。例えば、ある冬の酒宴の際、庭で密かに隆信の護衛をしていたが、その際、持っていた鎧が凍えて手から離れなかつたという(三の三五)。また、沖田畷の戦いで隆信が島津との戦いに敗れ無念の最期を遂げた際には、自分もお供をして死のうと言ひ出したという(三の二四)。このような直茂であるだけに、隆信の死後、その靈魂を供養したいという思いは強く、また、その靈魂を守護神として信仰したとされる。この点について、『葉隠』には以下のエピソードが伝わる。

隆信が戦死した後、直茂は、「それがしは島原でお供をいたすはずでしたが、一度薩摩に敵を討ち申すために、命永らえ、必ず取りかか

ろうと存じておりましたところ、歴戦の勇士たちは島原で討ち死に致し、生き残りました者は老人や若輩者どもでしたので、思うに任せず時が移りました。この事がかなわぬ前にお用い申しまして、お受けになりますまいと存じましたので、お用いも致しませんでした。一度念願が叶いますようにご守護ください」と祈念した。すると、秀吉が薩摩攻めのため下向したので、直茂から「旧敵ですので、先陣を仰せ付けられますように」と願い、叶いました。直茂は、「今度先陣を致す念願が叶い、帰りましてから当城の鬼門に一寺を建立いたし、お用いをはじめ、永く当家の弓箭の守護神と崇め申しましょう。一層ご加護をお加えください」と隆信の靈に祈誓して出立したという。その後、島津が降参したため、龍造寺政家に羽柴の名字、鍋島直茂に豊臣の名字と小袖二つを拝領した。帰国すると、金剛山に宗龍寺を建立し、七回忌の法事からはじめて弔った。合わせて戦死の人々も弔ったという(三の二四 論者訳)

このエピソードから、直茂が無念の最期を遂げた旧主の靈魂と、以下のように関わっていることが理解される。すなわち、まず非業の最期を遂げた無念を晴らすため敵討ちを誓い、その加護を仰ぐ。続けて、実際に敵を討ち、隆信の靈魂の無念を晴らす。以降、寺を建て永くその魂を供養するとともに、その力を戦勝の神、守護の神として取り込んでいる。

三 戦勝祈願と愛宕山の威徳院への護摩堂建立

直茂は、戦国時代の只中であつて、実際に多くの実戦を経験し、それらの戦場を生き抜いた歴戦の武士であつた。それだけに、以後の戦が徐々に無くなつていった時代を生きた佐賀鍋島藩主と比べると、とりわけ戦勝祈願に熱心であつた。

例えば、直茂は朝鮮の役の際、武運を祈るために京都の愛宕山の威徳院に護摩堂を立てている。これが、愛宕護摩堂のはじめであるとい

う。その後、細川家が護摩堂を建立し、徳川將軍家も護摩堂を建てている。護摩堂はある年焼失してしまったが、それをまた勝茂が再興した。その後また破壊されたのを、四代藩主吉茂が訴え出て再興したとされる（三の一〇）。

ちなみに、愛宕山の愛宕神社の祭神は伊邪那美命だが、本地は勝軍地蔵といわれる戦勝の神であった。そのため、古来多くの武士の信仰を集めている。

もちろん、武士たる以上戦勝祈願は後の藩主にとっても大切であった。実際、与賀社や本庄社など様々なところで、勝茂や光茂など後世の藩主も戦勝祈願している。しかし、朝鮮の役に出陣する際という極めて現実に切迫した機会に、他の大名に先立って始めているところに、その切実さを見て取ることができる。直茂は、戦場において運を強くするために、諸藩に先立って護摩堂を建立するほどに、勝運の神である愛宕の神を熱心に信仰していたのである。

四 安易に騙されないこと

これまで見てきたところでは、直茂は神仏や先祖の靈魂を篤く信仰し、それを具体的な行動で示しており、かなり信心深かったことが分かる。しかし、では迷信深く、安易に騙されたのかといえは、そうではなかった。直茂は、神仏への信仰につけ込んだ騙しやたり、おどしの類いに安易に乗せられず、事実を透徹した目で見抜き、常に相手の一枚上手を取る洞察力と実力とを兼ね備えていた。この点について『葉隠』には以下の三つの説話が記されている。

① 本庄院の「ご神体」が落下

直茂の家臣・藤島生益の家に、ある日、本庄院の住職が参り「今朝、ご神体のお身体を拭うために宝殿を開いたところ、お首が落ちておりました。早々に申し上げるためにお首も持参いたしました」と袈

袈に包んで差し出した。生益は「お首は直茂公がご覧になるものでもありませんので、お持ち帰りなされ。このことは申し上げておこう」といって、出仕して申し上げたところ、直茂はもつてのほか立腹して「さてもさても憎い坊主であるな。この加賀守（直茂）を騙そうと致すのか。すぐに穢多どもを召し連れ、拷問してありのままを言わせませよ」という。（中略）その後、生益は腑に落ちぬままその通りにしようとすると、僧侶は「ご神体を拭っていたところご神体が動き首が落ちましたので、ふと思いつき、先のように申し上げれば御造営もなされ、寺も栄え申すに違いないと存じまして、このように申しました」とありのままを白状したという。その後、生益がその旨報告したところ、今度は笑い出したという。続けて直茂は、なぜ見抜けたのかを説明している。すなわち、住職は、直茂がかつて寺に立ち寄った際、頭を地につけ、有難いと言っておきながら、出てきた吸い物の底に土が付いていた。それを見て、心遣いのなさを見抜いていたという。なお、その後直茂は、祈願する所だからということ、住職を殺しはせず、代えるだけに留めたという。（三の三一）。

ここで、直茂は僧侶だからといって安易に信じるのではなく、優れた洞察力で相手が自分に心を遣っていないことを見抜き、神仏の權威をもつてたかろうとしてきた相手の意図を正確に見抜いている。そこで、まずは拷問しようとして相手に嘘を白状させて懲らしめた上で、今度は祈願する所にちなむからという理由で、軽めの罪で済ませている。ここで直茂は、神仏の權威に安易に騙されることなく、事実を見抜いて相手の上手を取り、懲らしめた上で、さらに、軽めの罪で済ませて神仏も立てるといふ、余裕ある鮮やかなさばきを見せている。

② 山伏の夢のお告げにあえて布施

ある山伏が黒田長政のところへ来て「昨夜の夢に長政公が五カ国の太守になられますと見ました」といふ。長政の返答は「さてもさても

よい夢を早々に知らせてくれ有難いことだ。やがて五カ国の太守になったときには祝儀を遣わそう」といつて返した。(都合の良いことをいつて祝儀を取ろうとするのを見抜いてのことであろう。論者補足)山伏は思案に反し、今度は佐賀の国に来て、「直茂公が五カ国の太守になられると霊夢を見ました」と言ったので、直茂は「さてもさても良い夢を早々に知らせてくれて有難いこと」と言い、金子百疋を与えた。あるとき、お話の衆が「筑前の黒田長政はこのようだったと伺います。金子を下されたのはいかがなものかと下々のものどもが取り沙汰しています」と申し上げた。直茂は、「総じて道のものはその道で立ち行かねばならぬものである。山伏などはこのような事などを行って人の施しを受けるものなので、金子をくれてやったのだ」と言ったとのこと(三の四四)。

さて、この説話は、一見するとたかりに来た山伏に騙されてまんまと金子をせしめられてしまった話のように読める。しかし、直茂は意図を正確に見抜いた上で、相手の生活のために布施をしてやっていたのである。これは、山伏が神仏に関わる存在だからといって安易に騙されず、事実を見抜いて相手の上手を取っているという点で、前の説話と共通する。

③ 密通したものの幽霊を出なくする

お城の三の丸で密通したものを詮議の上、男女ともに殺した。その後幽霊が夜ごとに城の中に現れた。女中たちが恐ろしがり、夜になると外へも出なかった。久しくこのようであったため、御前様に知らせたところ、祈禱や施餓鬼などをお命じになられたが止まなかった。そこで、直茂公に仰せ上げられたところ、直茂公はお聞きになり、「さてもさても嬉しいことであるな。かのものどもは、首を切っても飽き足らない憎いものどもです。そうしたところ、死んでも行くべきところには行かず、迷い巡りまして幽霊になり苦を受け、浮かび申さないの

はうれしいことだ。なるほど久しく幽霊になっておりなさい」と仰せられました。その夜から幽霊はでなかったとのこと(三の二一)。

さて、ここで密通したものの幽霊に対して、女中達はただ恐れているばかりであった。他方、直茂の妻は祈禱や施餓鬼によって幽霊を出なくしようと試みる。妻の対応は、幽霊のことはその道プロに任せるというもので、当時にあつては、ごく常識的で合理的な対応である。また、祈禱や施餓鬼は、相手の幽霊の魂の安楽を願ってなされるものであり、相手に同情した優しい対応でもある。しかし直茂は、ここでもいかにも武士らしく幽霊相手に勝負の構えを取り、勝つための対応をした。すなわち、一切弱みも同情も見せず、むしろ幽霊が苦しんでいるであろうことを喜び、そのまま命じたのである。もし幽霊が実在するならば、彼らにとつてこれほど面白くないことはないだろう。なぜなら、相手を恐れさせ、苦しめるためにわざわざ幽霊になって出ているのに、むしろ相手を喜ばせてしまっているからである。そして、幽霊になっていること自体は、死後安定した世界に行かずに迷いの世界に居続けることであるから、苦しみの継続である。これでは割に合わないの、出なくなるのも道理である。ここで直茂は武士らしく、相手に勝負の構えを取って一切弱みをみせず、上手を取って相手に勝っているのである。

まとめ

直茂の超越者との関わりについてまとめておこう。直茂は、与賀神社の前を通った際、暗くて叶わぬという不思議な声を聞き、以来、常夜灯を供養している。これは、神仏の声を聞き取ることが出来る直茂の超越性を示すものである。また、直茂は、非業の最期を遂げた主君隆信の死後、その敵討ちをし、宗龍寺を建ててその無念の靈魂を供養し、守護神とあがめ、その力を取り込んでいた。また、常に実戦の最中にあっただけに、戦勝祈願に熱心で、京都の戦勝の神・愛宕神社に

他の大名に先駆けて護摩堂を建立している。他方、神仏への信仰につけ込んだばかりの類いには、安易に騙されず、事実を見抜いて上手を取った上で、罪を軽くしたり布施を与えたりする余裕あるさばきを見せた。また、幽霊の類いには、いたずらに恐れるのではなく、武士らしく一切弱みも同情も見せず相手の上手を取って勝つという対応をしている。

勝茂

次に、鍋島勝茂の超越者との関わりについて見ていこう。勝茂は、直茂の長男である。彼は、形式的には藩主の座に就かなかった直茂の代わりに、初代藩主となる。歴史上、慶長の役や関ヶ原の戦い、柳川城攻めなど、実戦経験はあるとされており、『葉隠』でも、直茂とともに切腹するか否かのぎりぎりの実戦経験があることが称揚されている（「序文」）。しかし、『葉隠』では武事における活躍以上に、直茂の死後、藩政の仕組みを詳細に整えた点が称えられている（「序文」）。さて、勝茂の超越者との関わりの特徴は、以下の四点である。すなわち、第一に、直茂を崇拜、第二に、直茂の信仰の継承、第三に、願文で家臣への願いが多く、第四に、合理的で醒めた視点、である。以下順番に見ていこう。

一 直茂を崇拜

初代藩主勝茂についての説話を中心に集められた聞書四は、勝茂が直茂を崇拜する以下の内容から始まる。

ある時、勝茂公のお話に「大切な判断に行き当たり、なんとも分かんがりたいとき、しばらく眼を塞ぎ、「この事を日峯様はどのようになさるだろうか」と思案しますと、そのまま道理が分かる」と仰せられましたとのこと（四の一）。

日峯とは、死後の直茂の法名であった。ここで勝茂は、直茂の死後、何か判断に迷った際、直茂ならばどうするかと考えると道理が分かる、という。勝茂は、生前から佐賀鍋島の人々に神のように崇められていた直茂（三の三〇）を、自らも、その死後までも神のように信じ、判断の基準としていたのである。

また、勝茂が死後までも直茂をいかに大切にしていたかという点については、次の聞書が注目される。すなわち、勝茂が西目筋において鷹狩りで鶴を生け捕りにしたとき、その場から侍一人をお使いに命じ、高伝寺に遣わされた。和尚は承って取り継ぎ、日峯様のご位牌に披露したという（四の四九）¹²。

ここで勝茂は、狩で生け捕りにした鶴を、ただちに菩提寺の高伝寺の日峯直茂の位牌に差し上げている。ところで、鷹狩りで得た鶴を捧げる行為は、江戸時代、将軍が鷹狩りで得た鶴を朝廷に捧げていたことなどからも分かるように、大切な相手に最高の敬意を示す行為の一つであった。したがって、ここで勝茂は、直茂を、鷹狩りの鶴をただちに捧げるほどの、最も大切な存在として扱っているのである。

また、勝茂が直茂を判断の基準としていたことについては、以下の説話が注目される。すなわち、勝茂が光茂に代替わりする前に、二十箇条ほどの訓戒を書いたものを渡したが、それらはすべて直茂の言葉であったという（四の五五）。勝茂は、次の代に引き継ぐべき国主としての大切な心構えはすべて直茂から学んだ言葉のなかにあるとし、それをそのまま光茂へと伝えていたのである。

このように、勝茂は死後の直茂を神のように崇め、直茂の言動を国主としての判断や行動の指針とし、またそれを後代にそのまま伝えようとしていたのである。

二 直茂の信仰の継承

また、勝茂は神仏への信仰においても基本的に直茂のやり方を踏襲

した。既に確認したように、彦山や与賀社、本庄社、高伝寺、愛宕神社など、直茂が大切に信仰していた寺社を、直茂と同様に信仰し、手厚く保護している。

三 願文に家臣への願いが多い

『葉隠』には、勝茂が神社に願文を収めている説話が二つ収められている。とりわけそのうちの一つから、勝茂の信仰の目的と特徴を窺い知ることができる。元旦ごとと与賀社、本庄社、八幡（現在の龍造寺八幡宮）に納め、大晦日の夜に願ほごきしたという願文である。

一、家中に良いものが出てきますように

一、家中のものが武士としてのふさわしさを取り失わないように

一、家中に病人が出てきませんように（四の二五）

後述する光茂の願文が、我が子への愛情が全面的に出ていて子孫繁昌に重きが置かれているのと比べると、すべて家中の者に関する願文であることが特徴的である。

ではなぜ、勝茂は家中の者にこだわったのだろうか。結論からいえば、直茂に国の統治を託され、それを何よりも大切なことと考えており、そのためには、家中に良いものがあることが大切との教えを受け、それをそのまま実践しようとしていたからである。

このことを裏付けるものとして、関連する二つの説話を挙げておく。まず、国の統治を託されたことについては、直茂二十五回忌の法事の際、勝茂が光茂に、直茂から聞いた言葉として「私の十三回忌まで国を治めてみなさいませ」との言葉を伝えている。そして、この一言を大事に思い、これが大きな荷となり、昼夜心を尽くし国を治めることのみを苦勞したところ、十三年も過ぎ、いま二十五年まで別状なく、めでたいことの上ないと述懐している（四の七三）。このよ

うに、勝茂は尊崇する直茂の言葉を大切なものとして担い、ただひたすら、国を治めることを目的として生きてきたのである。

次に、国を治めるには家中に良いものがあることが大切との教えを受け、実践しようとしていた点については、以下の説話が裏付けとなる。すなわち、直茂が死ぬ直前に病気が切迫した際、勝茂が面談したときに「国家を治めますのは、良い人を持つに極まる」との言葉を聞いたという（四の五五）。実質上の遺言である。勝茂は、直茂より国を治おさめる際の要点は良い人を持つことに極まるとの教えを受け、それをその通り実践するよう心がけていたのである。

四 合理的で醒めた視点

これまで見てきたように、初代藩主勝茂もまた、直茂を踏襲して仏神を篤く信仰し、保護してきた。とはいえ、では勝茂が単純に迷信深かったのかといえは、そうではない。他方勝茂は、合理的で醒めた視点を併せ持っていた。この点については、以下の説話が注目される。

ある年の元旦、息子の直澄（初代蓮池藩主）が、勝茂のもとに遅く挨拶に来た。遅参の理由を問うたところ、勝茂がいつも三社にお参りするため、自分も後から参詣したためであるという。対して勝茂は、「そなたは三社に参詣するには及ばない。自分は両親もおらず、在国では將軍へのお目見えもなく、自分より上への礼儀が年の始めにないので、三社に参詣する。その方などは、自分に祝儀を申せば済むことだ」と言ったという（四の三八）。

ここから読み取れることは、勝茂が単純に神仏を信仰して参詣しているのではなく、自分より上位のものに挨拶するためという、合理的な理由で参詣しているということである。さらに、ここでもう少し前提を補うと、『葉隠』において、武士は自らの非を知り続け、絶えず向上し続けるべきであるとされている（一の四七、二の三三）。このような前提を補うと、ここで勝茂は、自らが向上の道を歩みつづける

ためには、自分より上位のものが必要だからという合理的な理由で、神社に参詣していることが理解される。

また、ここで勝茂が我が子の参詣を止めていることも重要である。勝茂から見て、我が子にとって大切なのは、神より主君であるところの自分なのである。『葉隠』において、神仏への信仰も大切とされているとはいえ、主君より優先されるものではないことは、改めて確認しておこう。

まとめ

勝茂の信仰についてまとめておこう。勝茂は、直茂を崇拜し、直茂から託された国の統治を何よりも大切に考え、直茂の言葉を忠実に守ろうとしていた。それは、神仏の信仰においても同様で、直茂が大切にしていた信仰をそのまま踏襲した。その上で、神仏への願いは、家臣への願いが多かった。これも、直茂の遺訓に従ったことである。他方、単に迷信深いのではなく、一面において合理的で醒めた視点を併せ持っていた。勝茂は、自分より上位のものに挨拶するために、新年に神社に参詣するという。これは、『葉隠』の思想を踏まえると、常に上位のものを想定することで、我が非を知り、無限に向上の道を歩み続けることを可能にするために神仏を信じているということである。これは、盲信するのとは別の仕方であり、合理的に神仏を信じる生き方を選びとっているといえよう。

光茂

二代藩主光茂は、初代藩主勝茂の孫に当たる。光茂は、勝茂の四男で継嗣だった忠直の長男であった。忠直は、母が徳川家康の養女だったため、三人の異母兄を差し置いて継嗣とされた。しかし、二十三歳で瘡痍にかけり夭逝する。その跡を継いだのが、光茂であった。とは

いえ、家督を継ぐまでの道のりは平坦ではなかった。というのも、光茂が当時四歳（満二歳八ヶ月）とまだ幼かったことから、勝茂が、忠直の弟で五男の直澄に継がせようとしたからである。しかし、家臣団や忠直の兄・元茂の意見、そして乳母であった小倉殿の活躍により、光茂は老中にお目見えして盃をもらい、家督を継ぐことが確定する（五の一〇五）。そして二十六歳の時、勝茂の隠居に伴い、家督を継ぐに至る¹³。また、光茂に特徴的なことは歴代藩主の中でも最も子供が多く四十人の実子があったことである。とはいえ、早世した子供も多く、その数は十人以上に及んだ¹⁴という。

さて、光茂の超越者との関係は、これまで見てきたように、清久以来の伝統を引き継ぎ、歴代藩主が大切にしてきた与賀社や本庄社、高伝寺などを手厚く保護するものでもあった。しかし、以上のような来歴から、それらとは別に特徴的な点が六点ある。すなわち、第一に、徳川将軍家への尊崇と家康への信仰、第二に、夭逝した父・忠直の供養、第三に、小倉殿の供養、第四に、早世した子供の供養、第五に、願文に子供への愛情、第六に、多種多様な神社への目配せ、の六点である。以下、順に詳しく確認していこう。

一 徳川将軍家への尊崇と家康への信仰

主に光茂の事跡について記された聞書五を一読して印象的なのは、光茂の、徳川将軍家への尊崇の思いが強く表現されているということである。例えば、老中たちへ挨拶回りするとき、省力のため道順を変えるようなことを一切しなかったり（五の五六）、旗本や幕府直属の侍には、たとえ小身のものであっても陰でも疎略に言わなかったり（五の五七）、どこにいても、常に江戸の方角を意識して江戸の方を枕にして寝るようにしたり（五の六〇）、江戸城の櫓に鳥がついていたので「鉄砲で当てられるだろうか」と大名達が議論をしていて、光茂に尋ねたところ、その不忠を咎めて議論の相手になったり（五の七

四)、五代將軍綱吉の嫡子徳松が病氣の際には、佐賀で袴を着て数日すごしたり(五の七四)、日光東照宮に参詣したりする(五の九四)など、光茂の徳川將軍家への忠義が至るところで示されている。

他方、主に勝茂について書かれた聞書四においては、佐賀鍋島藩と徳川將軍家とはむしろ緊張関係にあったことが描かれている。例えば、島原の乱での佐賀鍋島藩の軍令違反が咎められ、危うく御家取り潰しの危機となったことが複数の説話で描かれている(四の五、二三、二四)。その際、勝茂とその家臣達は、いざとなれば、たとえ勝ち目がなく家が滅ぶ可能性が高くとも、徳川將軍家を相手に一戦する覚悟と準備があった。このような独立心と幕府との緊張関係のあった前代と比べると、聞書五では光茂が徳川將軍家に心から忠義を尽くしていたことが強調されているのである。

また、超越者との関係という点からいえば、東照宮への参詣が注目される。天下を統一した徳川家が強大な力を持っていた当時、家康の養女を母に持ち、幼い頃にお目見えを許されるなど將軍家とのつながりも強かった光茂にとっては、藩祖直茂をはじめとする佐賀鍋島藩の先祖だけではなく、家康もまた先祖であり、神であったのである。

二 天折した父・忠直の供養 長安寺

他方、既に触れたように、光茂の父・忠直は夭折しており、『葉隠』聞書五には、光茂がその忠直へ孝行と供養をしたいという極めて強い思いを持っていたことが描かれている。例えば、忠直の五十年忌の際に、惠峯和尚に弔いの仕方を尋ねたという(五の七一)。また、同じ五十年忌の際、自分は父が死んだときまだ四歳で何の孝行もできなかったからということで、幕府に亡き父の侍従への増官を願い出ている。これは、前例がないということ一度は断られているが、光茂が、それでは自分の官位を返上して亡き父に差し上げたいと申し出ると、そこまでの思いならばということ許されている(五の一〇)。

その際に、位牌も新しく作り直している(同前)。また、万治元(一六五八)年には、忠直の菩提を弔うために、興国山長安寺を建立し、位牌の安置を命じている。そして、賢崇寺の前住職・万休和尚を住ませ、切米十二石の俸禄と、敷地、田畑を与えるなど、手厚く保護している(五の一三五)。

三 小倉殿の供養 誓宗寺

また、光茂はとりわけ、自分を子供の頃から熱心に養育し、跡継ぎを決める際には命がけて自分に家督を継がせるよう働きかけてくれた小倉殿に、感謝の思いが強かった(五の一〇五)。そこで光茂は、その死後、十三回忌の菩提のため、誓宗寺という一向宗(浄土真宗)の寺を建てている(五の一三六)。

四 早世した子供供の供養 善応庵

光茂は、その性格を「子供だいじ⁵⁾」とも評されているように、子供への愛情が極めて深かった。

光茂は歴代藩主のなかで最も子供が多かったが、早世した子供も少なくはなかった。そこで光茂は、早世した子供供の供養のために寺を建てた。その寺が善応庵である。善応庵は曹洞宗の寺院である。与賀社や本庄社などと同様、現在の佐賀市本庄町本庄にある。それは、六歳で早世した光茂の子・左内の部屋を遣わし、早世した子供達の菩提のために光茂が建立し、寺号を移したものである(六の一九六)。すなわち、まず延宝七(一六七九)年寺号の移転をして、左内の部屋を客殿(持仏堂としてではなく接客の間)にして建立した。その後、元禄二(一六八九)年光茂は寺領十二石を寄付した。さらに、本丸だった持仏堂を善応庵に移し、早世した子供たちの位牌を立てた。さらに、天和二(一六八二)年より、早世した子供たちを追善供養するため、法華經一万部の書写を命じ、その通り行ったという(六の一九

八)。また、元禄十三（一七〇〇）年には、光茂が江副彦次郎に命じて、善応庵に早世した子供にまつわる様々な品を納めている。様々な品とは、へその緒、産着、生まれたときの髪、前髪、数珠一連などである。また、生まれたときから身につけていたお守りを灰にして、善応庵の万部塔の下に納めさせたとのことである（五の一四六）。

このように、光茂は早世した子供への思いが深く、その死後の靈魂を手厚く供養している。

五 願文に子供への愛情

ところで、光茂の子供への愛情が強かったことを裏付けるものとして、早世した子供への供養の他、神社に納めたいくつかの願文の内容に、子供への愛情を表したものが多い点が注目される。例えば、万治元年に仁比山山王に参詣した際の願書には、まず將軍の長久と天下の平安を願った上で、自分の息災よりも、親であるのでということ、とりわけ子供達の武運長久、息災延命を祈っている（五の一三三）⁽¹⁶⁾。また、万治二年に仁比山山王に寄付したときに治めた願文にも、四人の子供らの武運長久、息災延命を祈っている（五の一三五）。このように一貫して子供たちの武運長久と息災延命を祈っているのは、先代の勝茂が神社に納めていた願文の内容が、国を治めるために必要な家臣についての願いが強調されていたのと比べると対照的である。

そして、このような光茂の性向は、つきつめて考えると、常朝が理想とした佐賀鍋島藩の武士道における深い主従関係とは矛盾するものであったように思われる。というのも、子供への愛情は生まれつき本能に基づくものであるが、他方、義理を重視した直茂（三の一）や、勝茂の家臣への思い、そして常朝が重視した忍ぶ恋にも喩えられるような主君への想いは、たとえそれが儒教的士道のいうような道理に基づく義務とは異なる情誼的なものであるにせよ、主君と臣下が相互に

努力することによって成り立っているという点で、やはり、義理に属するものであるからである。

六 向陽軒

その他、光茂は勝茂が立てた別邸・向陽軒に、武運長久と子孫繁昌のため、多くの神社を勧請している（五の一三七）。その神社とは、天照大御神の内宮と外宮、住吉、天満宮（菅原道真）、玉津島、人丸（柿本人麻呂）、賀茂、素戔鳴尊命、東照宮（徳川家康）、彦山、山王、八幡、水無瀬、春日、稲荷のそれぞれの神社のことである。

さて、彦山権現への願文もそうだが、ここで光茂は当時の日本や佐賀で信仰されていた代表的な神社の多くに目配せし、それらの神々を勧請していることが注目される。ここに、光茂の信仰の特徴として、広範囲への目配せを指摘することができる。徳川家への忠義や、皇室尊崇などを考え合わせると、光茂は、神や仏、死者の靈魂といった超越的なものを含め、多方面に同時に気配りをするのできる配慮の人だったのである。

まとめ

以上、光茂の信仰についてまとめておこう。光茂も、歴代藩主が大切にしてきた神社を手厚く保護した。それに加えて、徳川將軍家を尊崇し、東照宮に祭られる家康を神として信仰した。また、天逝した父・忠直や、育ての親の小倉殿に対する供養の思いが深く、実際にそれを実行した。また、多くの子供を授かり、早世した子供も多かったことから、それらの子供の供養を篤くした。さらに、神社に込めた願文には、子供への愛情を表したものが多く、子供を強く愛する性格であったことが分かる。総じて光茂は、恩人や親、子への情愛を重視する傾向があり、神仏への信仰も、それが元になっている。また、当時広く信仰されていた多くの神社を勧請しており、信仰においても、広

範囲への配慮という特徴を見て取ることができる。

注

- (1) 本稿での『葉隠』からの参照や引用は、『定本 葉隠「全訳注」』（佐藤正英校訂、吉田真樹監訳注、上・中・下巻、ちくま学芸文庫、平成二十九年）による。なお、『葉隠』は「序文」と十一の聞書からなり、各聞書は長短の説話に分かれているが、本稿で参照する際には、「序文」以外の箇所は、上段に聞書、下段各に説話の番号を記し、「(一の二)」などと略記することにする。また、引用の際には、読みやすさに配慮し、一部、論者が書き下しやルビを施した。また、『葉隠』現代語訳は、前掲書を参考にしながら論者が施した。
- (2) あるいは、神仏への信仰を排除するとはではないものの、主君や親の後回しにすべきであるともいう。この点を裏付けるものとして、毎朝の拝みの方法は、主君、親、そのあと氏神、守仏であるとした聞書一の三二を挙げることができる。種村完司『葉隠』の研究 思想の分析、評価と批判』（九州大学出版会、平成三〇年）第四章参照。
- (3) 『葉隠』における武士の奉公人と仏教や慈悲との関係については、聞書一、二に関連する記述も有り、多くの先行研究が存在する。しかし、この点については、それだけで大きな問題であるので、将来の課題とし、本稿では扱わないことにする。
- (4) 例外的に、種村完司前掲書、および、『葉隠研究』（葉隠研究会）所収のいくつかの記事が、この問題について取り上げている。本稿でも適宜参照することにする。
- (5) 本稿同様、聞書一、二への焦点を取り払い、広く『葉隠』全体の思想の研究を志向した代表的な先行研究に、小池喜明「葉隠 武士と「奉公」」（講談社学術文庫、平成一年）がある。しかし、同書には仏教や慈悲については一章を割いての詳しい論述があるものの、本稿で取り上げるような神仏への信心についての議論はほとんどなされていない。
- (6) この節は、栗原荒野『校註葉隠』（内外書房、昭和十五年）では聞書六の一節としてあげられている（四六〇頁）が、最も信頼性が高いとされる小山本にはない。
- (7) この点、栗原前掲書が注目している。本稿の着想は、その指摘を承けたものである。
- (8) 彦山は、享保一四（一七二九）年に、霊元法皇が、非常に優れているからということ、英の字を付けてより、英彦山と書かれるようになっていく。詳しくは、金子信二「葉隠のなかの民俗——英彦山信仰」（『葉隠研究』第一八号、平成四年）参照。なお、同論文には、英彦山信仰の肥前とは旧くから関係が深く、龍造寺隆信は自分に従わない彦山の山伏達を攻めたが、鍋島氏は代々深く信仰し、良好な関係を保っていたとされる。
- (9) 栗原前掲書四六〇頁参照。
- (10) ちなみに、藩祖直茂は、幼名を彦法師と称した。これは彦山を意識したことだと言われる。金子前掲論文参照。
- (11) ただし、これと一見すると内容上矛盾する説話が八の五九に掲載されている。すなわち、あるとき鍋島茂里が、戦勝祈願のため愛宕神社に参りたいと申し出たところ、父茂賢が立腹して、祈る必要はない、鍋島の先手は、愛宕権現が敵方から現れたら、真つ二つに叩き切つて先手を務めるべきであるといったという（八の五九）。あるいは、主君であった直茂と先陣を務める武将とは、役割が異なるのかもしれない。また、本稿で後述するような武士の合理主義が、ここでも現れているとも考えられる。ちなみに、種村前掲書でもこの説話を取り上げられているが、そこでは直茂の神仏の相対化に通じる例として挙げられている。しかし、その場合、一方で他ならぬ直茂本人が熱心に愛宕神社を信仰していたことを踏まえ、そのことを位置づける必要があるだろう。
- (12) 『定本 葉隠「全訳注」』における佐藤正英の「上巻解説」は『葉隠』についての短い解説文だが、その中で佐藤は勝茂の説明として、教ある説話のなかからこの部分だけを取り出している。
- (13) 詳しくは、松永義弘「光茂公とその時代」（『葉隠研究』第三三号、平成九年）参照。
- (14) 栗原荒野『葉隠挿話集（その8）』（『葉隠研究』第一二号、平成元年）参照。
- (15) 同前。
- (16) 種村完司は前掲書第四章において、戦国期の武士達が戦での勝利や戦果、生存が神仏祈願の目的であったのとは対照的に、泰平期の武士は御家存続と子孫の繁栄のための神仏信仰や神社崇敬の傾向が強まったとする。そして、それを裏付ける一例として、この子供達の武運長久、息災延命を祈る光茂の願文が挙げられている。しかし、本稿での考察を踏ま

えると、戦国期の直茂の願文には概ね種村説が当てはまるとしても、さらに、御家存統のために家臣との関係を重視した勝茂の願文と対比するならば、光茂の願文は、同じく御家存統のためとはいえ、家臣との関係よりも子供への本能的な愛情を重視しているものというように、その特徴をより詳細に理解できよう。